月刊

えくてびあん

立川と語ろう　立川に生きよう

8

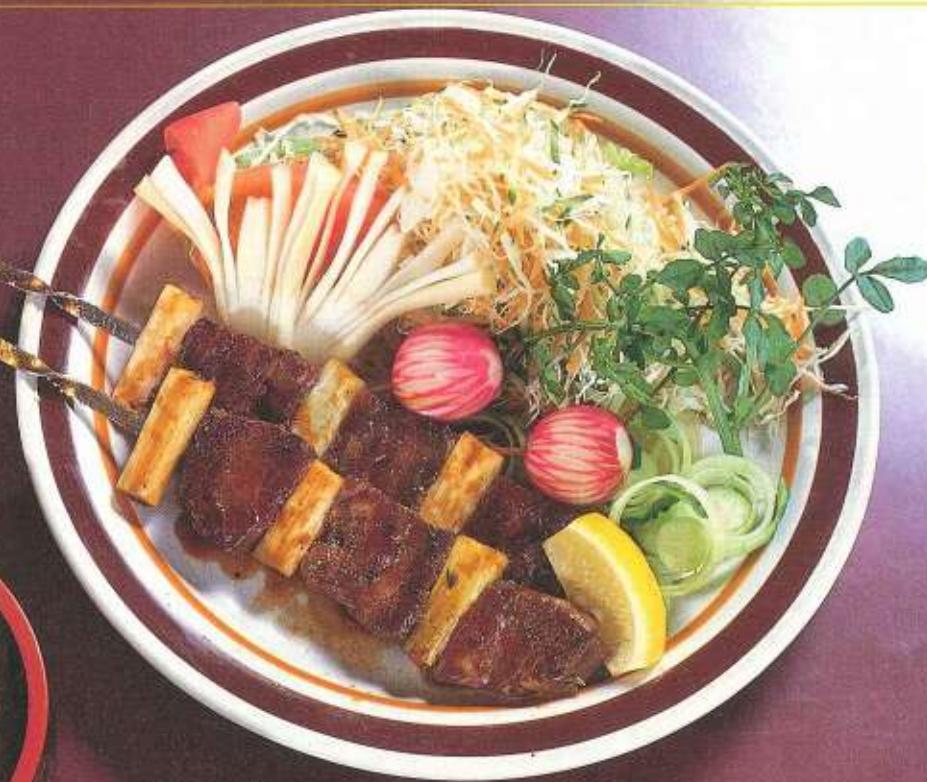
<EKUTEBIAN VOL.12 AUGUST '1993 EKUTEBIAN>

まい　あーと■創作人形「ベアーズ」by 岩切克樹、映幹子

佐藤正夫の牛肉の串焼き&揚げチーズ&味噌おでん

５年前に羽衣町（２丁目）の『蔦屋』は開店した。実は、それ以前に富士見町（７丁目）で「和風洋食」の店として固定客をつかんでいたが、佐藤さんが身体をこわしたためにやむなく休業。そして今度は羽衣町での再出発。佐藤正夫さん。東京・四ッ谷の料亭『蔦の屋』に23才の時、修業にはいる。おそい出発であったが、人一倍の努力が実って、30才で花板。東京オリンピック前後に和洋折衷の料理開発を熱心に進めてきた。今回掲載の「揚げチーズ」もその一例で、プロセスチーズを海苔で巻いて、餃子の皮をくるんで揚げた料理だが、佐藤さんの開発した一連の料理が業界の評判になり、多くマスメディアにも取り上げられた。立川で独立してからも、洋食の中にさりげなく和風味を添えて人気がある。

撮影：板橋一明

TACHIKAWA どき

夏祭がまた来る

●えくてぴあんレポート

毎年8月28日の直前の土日に立川諏訪祭りが行われる。
今年は、8月21(土)、22(日)、
郷土のお宮を中心に街中、一つになれる日。
主役は、江戸時代から豊作とふるさとの安泰を祈って
伝えられた獅子舞。そして、神輿のパレード。
街が、また一つ優しくなって行く、その準備も順調。

お店探検隊ですって?

旗を掲げて、お店へぞろぞろと入る小さなご一行。あれあれ、ちゃんと買物できるかなあと、思いしや、お店の人に何やら、手を挙げて質問しています。これは、実は、小学1、2年の新しい教科となった、「生活科」の実習風景。町と人との関わりを深めることをねらいとして、一小の2年1組、2組の生徒たちが、近所のお店へチャレンジ。今日、ここのお店で、商品全ての値段を聞いていたら、二千五百万円だったと、家に帰ってからも得意げに話す探検家も。この探検隊を派遣した、担任の原田喜美子、小嶋明子先生は、「自分の目を通して社会と触れさせてあげたい」。次回は電車探検とか。

立川トピックス

土と対話して親子二代

柴崎町の東陶房で7月3日から、東由山・典男親子作陶展が開催された。息子である典男氏の日本陶芸展等連続入選回を記念しての作品展である。父、由山氏は、朱泥に小刀で彫刻を施す彫陶一刀彫りの第一人者。典男氏は、釉薬をかけずに奥の深い色合いを出す独自の技法を持つ若手実力陶芸家。親子二代で作風は異なるものの、土のあたたかさを語る心意気は同じである。客に対する説明にも思わず言葉に力がこもる。「いずれ立川に陶芸教室を開いてみなさんと陶芸の楽しさを分かちたい」と語っていた。

真如苑だより

この夏を、いかがおすごしでしょうか。

古人は夏を赤色として表現いたしました。「朱夏」と云います。どこか、炎天の中にいる私たちのこころ模様を表わしている言葉のように思います。

「言うまいと思えど今日の暑さかな」の候、ジリジリとした暑さの中の境内から、涼しい真如苑の精舎へ皆さまをご案内させていただきます。

■日時　8月25日(水)
　2時~4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん!
リストのお店にはいつでも えくてびあん!

プランクトンのひとりごと

小俣 八洲雄
(工業デザイナー)

いつごろから立川を知っていたかは分からない。たぶん物心つくかつかない頃、田舎の山梨と都内との往復のうちになんとなく覚え込んだのだろう。小学生の頃休暇になると田舎へ送り込まれ、その途中立川を通過するとほっとし、逆だと日常生活に戻ったことを実感した。

溝ノ口にある電気メーカーに就職してすぐに親の家を出た。学生の頃、都市や環境問題に首をつっこんでいた私は自分の定住場所を決めるのに結構迷った。そして立川を具体的に意識する様になった。子供の頃三鷹の天文台の辺りは空気が澄んでいた。しかしその頃すでに立川まで来なければ空気が淀んでいたのだ。

当時憧れの団地に抽選でうまく入り込み、この立川にある都市計画法第一号の3DKで建物の割りには敷地の広い、子供の遊び場の多い富士見町団地に結構満足した。会社へは南武線一本で30分、中央線で田舎へ直結、都心へも30~40分、正に理想的であった。戦前飛行家だった父は立川にも結構縁があった様だが、私は模型飛行機に熱中していた頃よく多摩川に飛ばしに来ていた。その川原がすぐ目の前にあった。

〝あと、お嫁さんだけ〟の私だったが外国へ留学してしまった。ドイツでの生活も10年過ぎた頃、生活も安定し、毎週の様にパーティーで明け暮れていた。しかし妙に日本のそれも子供の頃とか田舎の夢を頻繁に見る様になったので、私の子供の知らぬ国、日本へ帰る決心をした。

団地の前にはもうひとつ団地が建っていて多摩川は見えなくなっていた。それでも私は日曜になると弁当を持って子供と川原で食事をしたり自転車で一回りするのが常であった。ただ、急増した人口の割りにはこの目と鼻の先のオアシスへ来る人が以外と少なく不思議であった。

そんな時、東京には珍しいオープンな〝土着〟の家族と知り合った。私よりずっと若いのにこの夫婦はコーヒーもワインも全く駄目で純日本式であった。ご主人は5時になると自転車で退勤し、夕食前に犬を連れて川沿いを散歩する。山登りもずっと以前から続けている。奥さんはとにかく料理が上手、又邦楽ならなんでもOKである。週に1~2度は二人で近くの小学校でバトミントンのトレーニングをしているとの事。娘さんは受験勉強はしないが民謡はピカイチ。呼ばれてお邪魔するとそこには私の子供の頃の家庭があった。

私は立川の〝地の利〟や恵まれた環境の地に、図書館は自分の図書室、市民会館は自分の音楽室、公民館は自分の趣味のサロン、昭和記念公園、立川公園や根川は自宅の庭で市営プールも自分のものだと思っているので、結構公共施設を気楽に利用している。只、大金持ちなのでおうように一般にも公開し、めんどうくさいので他の人に管理させている……と。

暖流と寒流の接点、そこはプランクトンが生息し易い。

先月号の答え
牛を馬に乗りかえる
庇を貸して母屋をとられる

東風

印刷物を製作する人は、誤植をなによりも恐れている。恐れていながら尚、根絶できない。専門の校正者に「一字いくら」の約束でみてもらっても皆無とならないのが、誤植というもの◆それはそうかも知れないが、自誌の誤植はなんともやり切れない。編集部が書いた記事ならばとにかく、その道の方にお願いして執筆して戴いた原稿に誤植があったら、読者にご迷惑を掛けるばかりか、執筆者にも申し開きが出来ない。誤植を見付けたときの、ハッという胸の痛みから編集者はいつ、開放されるのであろうか◆先月号のエッセー『夢に乗る』(中野明氏)の冒頭に「鉄道研究家――それが私の職業である」とある。ところが、原稿は鉄道研究家が「電車運転手」になっている。そして初校、再校ともに原稿通りだったのに、刷り[illegible]をしてそっと差替えたかのように「電車運転手」が「鉄道研究家」になっている。早速、印刷所に確認をとってみたのだが、すでに手遅れで、ここまでくると責任の擦りあいに終ってしまうから、次号からはコミュニケーションを密にとることとくらいしか話し合うことがない◆エッセーの主人公はこれから夢を見ようという段取りで、主人公の職業が大切になってくるのだった。中野さん、読者の皆さん、ごめんなさい◆ひととゐて蛍の闇や　えくてびあん

(編集)池田隆男　隅川理　名尾憲眞　中村能華　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
(写真)天野武男　板橋一明　井上義治
スタジオ269　桜川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第109号
平成五年八月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集発行人　立井啓介
印刷所　(株)大廣社

土俵下に父の声ひびき

〝立川強し〟と全国に馳せたスポーツと言えば、相撲。中でも、諏訪神社で行われる全国少年相撲大会は、今年で十回目を迎え、今回も立川勢の活躍が期待されている。ところが、二五年前、相撲経験のなかったビジネスマンが息子の興味を通して、この世界に入った。それが、古豪立川のスタートになるとは、その時は誰も知らなかった。

先ごろ、両国国技館で開催された、わんぱく相撲東京都大会(〔財〕東京青年会議所主催)で、三位、四位、と入賞した立川A、Bチームが共に全国大会に出場する。同じ地域からの2チーム出場は全国でも葛飾と立川のみ。個人では立川のエース、神保昌登さん(曙町)が都横綱に輝き、層の厚さを感じさせている。七月二五日に開催される全国大会目指して、中村勇司会長指導の下、毎日、稽古に励んでいる。

立川の相撲界には、もう一人の立役者がいる。佐川秀夫さん(若葉町)がその人である。秋の全国少年親善相撲立川大会の事務局を自宅に置き、今からその準備と進行に追われている。立川市相撲連盟理事長である。相撲好きだった息子さん(当時、小学校4年生)の付添いで、相撲連盟の役員を始めたのが二五年前。某外国銀行のバンカーとして多忙を極めていた佐川さんが相撲に興味を持つようになったのは、実はこの時からだった。相撲に夢中の息子さん(現、監督の聡彦さん)は、錬成館でも活躍。小学5、6年でも優勝を重ね、中学に入っても相撲をやりたがった。ところが立川の中学には相撲部がなく、指導者もいなかった。学校の部活動に所属していなければ、大会への出場資格すらなかった。しかし、佐川さんは、怯まなかった。バンカーの気質からか、丁重に中体協とも交渉を進め、指導を錬成館の方で責任を持つことで、ついに、その許可をもらった。その時には、息子さんは、既に中学2年になっていた。初めて、やっと、出場できた全国中学生大会。立川チームは、初出場にして初優勝。会場から喜びの連絡をすると、祝賀会をしよう、ということになり、元、立川市教育長である砂川昌平さんたちが待っていてくれた。こうして、華々しいスタートを切った、立川の相撲界。その模様が、テレビに報道された。それを見ていた愛知県の岡崎のチームが遠征稽古に来たい旨、佐川さんのところに電話が入った。せっかく、遠くから来るなら、こちらも誠意を尽くそう。それが礼儀だ。そう思った佐川さんは、近くの府中と都内から文京も呼んで、チームを組織して小さな大会をやった。これが、全国少年親善相撲大会の始まりだった。それからは、輪のように広がって、誰でも参加できる大会にしたい。その思いが、全国へ馳せて、今、この秋で十回を数える。全国からの六五〇名参加の宿舎の手配から、全てを担当。力士の為に立川競輪場や府中競馬場などの選手宿舎を借りる準備一つ一つも4カ月前からスタートさせていく。貴ノ花、若ノ花も、この立川大会に来ていた。今、この立川大会を制することが、将来の登竜門と言われている。しかし、その大会を作って来たのは、むしろ、相撲経験のない、ビジネスマンだった。佐川さんは言う。「土俵下がどんなに騒がしくとも、子どもはいつも自分のことを指導していてくれる声は、土壇場でも確実に聞きとれる。それで勝てることは多い」と。はじめ息子を通して、子どもの声を聞いたこと。子どもへ声を掛けたこと。何でもないこの小さなことが、時には経験を越えて、大きく育てるということを語ってくれているようだ。今年、佐川さんは、東京都の国体監督となった。人前で目立つことはなく、静かにもいつも温かく笑みを浮かべている佐川さん。それが、立川の本当の強さであり、立川の誇りだった。

▲都大会3位となった立川Aチーム。右から、染谷学さん(小6)、中村勝さん(小5)、神保昌登さん(小4)

◀アマ相撲世界一となった斉藤一雄さんもこの道場出身

▲わんぱく相撲で都横綱となった神保昌登さん(曙町)

◀稽古に熱中する子供たちと郷原指導部長

◀これからの立川相撲界、期待の星たち

ことわざ回答㊶

漢字一字挿入せよ

牛を□に乗りかえる

□を貸して母屋をとられる

ハーイ祭りだよー

表紙は語る

まい あーと
創作人形
「ベアーズ」
by 岩切克樹・映幹子

今回の作品は、人形作家岩切克樹・映幹子さんの創作人形「ベアーズ」。

「出会った時に、口元が自然にゆるむような人形を創っていけたらと思っています。ジャンルにこだわらず物を創ること。特に〝ヒトガタ〟を創ることが好きなんですね」とは映幹子さん。ご主人の克樹さんは、ケンタッキー・フライドチキンでお馴染みのカーネルおじさんのそっくりさん人形のデザインをはじめ、テレビ番組で使われる、タレントのそっくり人形、企業ディスプレイの多くを手がけている。そして、ご夫婦一緒に、国立駅近くで、人形教室も開いている。そこでは、窓越にいろんな人形たちが、出迎えてくれる。

「子どもの頃は、自由に何かを表現していた。大人になって気づいてみたら、何かが邪魔して創れなくなっていた。既成の形にこだわらず、それぞれの個性や感性を生[illegible]子どもの感性と大人の技術をあわせ持った作品創りをしたいですね」と。岩切さんの手にかかると、冷たかった人形に、体温が宿り、瞳もクリクリと動きはじめるようだ。

立川クイズ

私たちが利用している公民館は、中央、砂川、西砂、高松、錦、幸の六つ。生活講座や情報交換の場として役立っています。立川市の公民館建設の歴史は、大戦後、ある合言葉のもとに旧陸軍の施設の払い下げを受けて、市民の寄付金募集から建設費を生みだして、諏訪の森の一角に東京都第一号と言う現在の公民館の前身が完成しました。では、このときの公民館建設のためのある合言葉とは何だったのでしょうか。

①立川の文化は諏訪の森から
②市民の憩いの場を
③文化的な生活を立川市民に

[7月号の答]　❶
多摩をイメージさせる言葉とは、やはり自然を思い起こさせるようで、十二支に例えた場合には、「うさぎ」と言う回答が一番多く、次いで「うし」でした。自然の野を駆け回るうさぎやのんびりと草を食むうしを想像するのは、東京23区が忙しすぎるイメージなのでしょう。

新連載

眼が語る

眼は口ほどにモノを言う。
コトバにならない思いも語る。

No.1 稽古する眼

空手道場にこだまする掛け声。その中にひときわ甲高い声が響いていた。女性である。よく見るとその瞳にはとても力がある。何かを求めているからなのか。少なくとも本物に近づこうとしている勢いの所為なのか。物事の芯を見ようとしている眼差しだった。

撮影：枝川一己
デザイン：池田隆男